

卑弥呼の墓は永遠のロマン

2022 年 6 月 10 日

我部山 民樹

1. はじめに

邪馬台国は日本の古代史最大の謎だが、卑弥呼の墓が特定されるまでは邪馬台国論争は続くだろう。墓の特定には候補の古墓を発掘することが必然だが、発掘を制限されている古墳もあるため、卑弥呼の墓論争はいつ果てるとも分からないだろう。永遠のロマンだ。

卑弥呼の墓に関する自分なりの理解をまとめてみる。

文献によれば『卑弥呼の墓について魏志倭人伝には『卑弥呼の死後、大いに冢(つか)を作る。径百余歩、殉葬(じゅんそう)するもの、奴婢(ぬひ)百余人』とある。ただし、魏志倭人伝には卑弥呼の亡くなった年号の記録はない。のちに書かれた中国の歴史書『北史』によれば、「正始中、卑弥呼死す」とあり、おそらく、西暦 250 年前後に卑弥呼が亡くなったことが推測される。また、倭の墓について「棺あつて槨(かく、棺の周りを囲む木の外箱)なし」』とある。

また『正始元年(240 年)、(帯方郡)太守・弓遵(きゅうじゅん)は*1 建中校尉・梯儁(ていしゅん、最初の魏使)等が詔書、印綬(＝親魏倭王という地位の認証状と印綬)を捧げ持って倭国へ行き、倭王に授けた。並びに詔(みことのり、天子の命令)をもたらし、金、帛(はく、絹布)、錦(にしき、種々の色糸で地色と文様を織り出した織物の総称)、罽(けい、魚を捕る網)、刀、鏡、采物(さいぶつ、身分を示す彩飾を加えたもの)を下賜した。倭王は使に因って上表し、詔の有難さに感謝の意を表した。』とある。

* 1. 建中校尉(けんちゅうこうい)

- ・建中校尉は武官の名。後漢末から魏にかけて濫授された校尉のひとつ。
- ・校尉は 中国の官名。漢代には宮城の防衛や西域鎮撫などに当たった武官。のち、武将の榮譽名となり、さらに将軍に次ぐ位の名となった。

まずは卑弥呼の墓のサイズである。径百歩は、1 歩を六尺とし、当時の魏尺は 24 センチなので 144 メートル余りの径となる。径百余歩はほぼ径 150 メートルとなる。これは魏使・張政の報告によるものがベースであろう。張政は自ら墓の大きさを歩測することができただろう。他の方法でも測定したかもしれないが。張政は 247 年に倭国に派遣され、20 年ほど倭国に滞在し、266 年に帰国したとされ、247 年頃に死去した卑弥呼の墓の築造の様子をつぶさに見たうえで、卑弥呼とその墓に関する情報は得ていたはずであり、彼や魏志倭人伝の作者が改ざんする理由も見当たらないので墓の大きさは正確と判断であろう。

3 世紀頃に築造されたと想定される墓でそのサイズに見合う墓は箸墓古墳のみであると言っても過言ではなく、有力な候補と言える。しかし、箸墓古墳は宮内庁の管轄下にある、発掘することができない。宮内庁により第 7 代孝霊天皇（生没年不詳）の皇女、倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）の墓と治定（じじょう）されて管轄されているのだ。

孝霊天皇、倭迹迹日百襲姫命ともに実在性について諸説あり、架空の人物とする説もある。

卑弥呼の墓の決め手は卑弥呼が魏から授けられたとされる『親魏倭王の金印』や 100 枚の銅鏡が墓から発掘された場合、殉葬者の奴婢百余人らしき人骨が発掘された場合であろう。箸墓古墳以外の発掘した古墳からは該当する金印は見つかっていないし、発掘された銅鏡の中では未だに卑弥呼が授けられた鏡と特定されるものは見つかっていない。

もし『親魏倭王の金印』が卑弥呼の墓とおぼしき以外の場所で発見されたとしても、志賀島で発見された『漢委奴国王印』と同じように謎とされ、結局は偽造説の論拠とされる恐れがあり、その構造、字体、素材の組成等で議論が噴出し、特定するまでには至らず、真贋論争に繋がってしまうだろう。

2. 卑弥呼が魏から授かった銅鏡 100 枚の候補

すでに発掘された銅鏡からは卑弥呼の銅鏡 100 枚と特定されるには至っていない。いずれの鏡も否定的な見方がされているようだ。おそらく卑弥呼の墓と断定された古墳から発掘されるまでは特定されないだろう。最悪の場合、卑弥呼の銅鏡が既に壊されて新たな道具に再生されてしまったことも否定できないので、その場合は永遠に発掘されないことになる。

現在のところ、発掘された銅鏡の中で、卑弥呼の銅鏡の候補として議論されているのは内行花文鏡と三角縁神獣鏡のようだ。

○**内行花文鏡**（ないこうかもんきょう）とは、中国の後漢時代（25～220 年）で流行した銅鏡である。日本には弥生時代（～3 世紀中頃）から古墳時代（3 世紀中頃～7 世紀中頃）にかけて輸入されたが、模造して作られた倭製鏡もある。



○画文帯神獸鏡（がもんたいしんじゅうきょう）

中国の後漢代（25～220 年）に作られた鏡の一種。 神仙や靈獸の像を主文様とし、外側に、日輪を従えた車、それを曳く獣、飛仙などの群像を描いた画文帯をめぐらす。 図像は浮彫で表され、細い線を用いた細密な表現を特徴とする。



○三角縁神獸鏡（さんかくえんしんじゅうきょう／さんかくぶちしんじゅうきょう）

銅鏡の形式の一種で、縁部の断面形状が三角形状となった大型神獸鏡。

日本の古墳時代前期（3 世紀中頃～4 世紀中頃）の古墳から多く発掘され、面径は平均 20 センチ程度。鏡背に神獸（神像と靈獸）が鋳出され、中国、魏の年号を銘文中に含むものは 2 点発掘されている。



三角縁神獸鏡。(国・文化庁保管、写真／鳥取県教育委員会)

「三角縁神獸鏡」という名前は、鏡の縁の断面部分が三角形になっており、背面の模様「神と獣」が刻まれているという解釈から名付けられた名前である。鏡の大きさは概ね直径が 23 c m 前後で、鏡面がゆるやかな凸面を持っている。この鏡は前漢鏡や後漢鏡と違って、主に近畿圏を中心として、全国各地の古墳から出土し、その総数は約 500 枚程度と言われるが、正確な数値を把握している者は専門家にもいない。まだ発掘調査されていない、大阪府高槻市の関

鶏山古墳等のようにファイバースコープなどの挿入で既にこの鏡が埋納されている事が分かっている古墳もある。だとすれば、まだ相当数の三角縁神獣鏡が地中に眠っている可能性は極めて高く、学者によっては1,000枚ほどあると推測する人もいる。この鏡は、いわゆる「魏志倭人伝」に、魏の皇帝が倭の女王卑弥呼に「銅鏡百枚」を与えたと記されている、その鏡そのものであるか否かを巡って、絶えず邪馬台国論争の渦中にある鏡としても有名だ。京都大学教授であった考古学者、小林行雄や、元奈良県立橿原考古学研究所所長の樋口隆康氏ら、いわゆる「邪馬台国＝畿内説」を唱える学者達は、卑弥呼が魏からもらった鏡は、この三角縁神獣鏡を主とする鏡であると主張するが、最近では、畿内説論者であっても、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の館長である河上邦彦氏のように、三角縁神獣鏡は卑弥呼がもらった鏡ではないと言う人たちも現われてきた。しかし、三角縁神獣鏡は100%わが国から出土し、中国からは1面も出土していない事（この後、中国でも1面出土された）、また、畿内では、4世紀の古墳時代の遺跡からのみ出土し、邪馬台国時代の3世紀の墓からはまったく出土しない事、さらに、鏡の直径も平均22cmほどで、中国で出土する後漢・三国時代（魏・呉・蜀漢）の鏡よりも、はるかに大きい事、華南の鏡のデザインや江南の銅が用いられている事、三角縁・神像・獣像などの各要素は、洛陽付近出土の銅鏡には認められない事、などの理由から、同志社大学名誉教授で考古学者の森浩一氏、産能大学教授の安本美典氏（数理歴史学）、元宮崎公立大学教授の奥野正男氏（考古学）などは、「三角縁神獣鏡」は、中国から輸入された鏡ではなくわが国で作られた鏡であろうと主張する。すなわち三角縁神獣鏡は、邪馬台国の位置をめぐる畿内説・九州説の闘いの渦中にある鏡なのである。

○卑弥呼が授かった銅鏡が三角縁神獣鏡であると肯定する派と否定する派のそれぞれの根拠

肯定派	否定派
・卑弥呼が魏に使節を派遣した『景初三年』（魏の年号・239年）を記した銘文の鏡が発見されている。 ・『銅は徐州から出、師（職人）は洛陽から出る』という銘文の鏡がある ・魏の鏡と共通する特徴がある	・中国ではたった一枚しか発見されていない。 ・『景初四年』（240年）という実在しない年号を記した銘文の鏡が存在する ・100枚を大きく超える数

・成分分析によって鉛の成分が魏鏡に似る	・成分分析によって銅の産地は神尾銅山と推定 ・黒塚古墳の発掘状況からみて三角縁神獣鏡は粗雑に扱われている ・鏡の多くは4世紀の古墳から出土 ・銘文が稚拙 ・呉の鏡と共通する特徴がある
---	---

これらの論拠に対し互いに反論を重ねており、結論は出ていない。今後も卑弥呼の銅鏡を特定できそうもないので、銅鏡が邪馬台国を特定する決め手になることは期待できないだろう。

3. 卑弥呼の墓の候補

結局は墓を発掘し、例えば金印や銅鏡が発掘されなくても、その他の遺跡物で卑弥呼の墓を特定することが必要のようだ。

まずは卑弥呼の墓の候補を絞り込むことが必要だ。

○畿内説派

弥生ミュージアムの資料によると『魏志倭人伝には卑弥呼が死んで径100歩の墓を作ったとあるが、この規模は奈良盆地にある箸墓古墳にちょうど符合する。こうした大規模な墓は当時の北部九州地方には無い。

箸墓古墳の近くにある弥生時代終末期の大規模集落、纏向遺跡からは、東海地方をはじめ他の地方の土器が多数出土している。ここに、日本各地を支配するような大きな勢力があったことを窺わせる。』とある。

箸墓古墳



○九州説派

『邪馬台国と大和王朝は別々だったのではないか』という考えだ。福岡県の平原（ひらばる）遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡、宮崎県の西都原（さいとばる）古墳群、大分県の宇佐神宮が候補地だ。

また新説では『魏の使者が往来時には必ず伊都国にとどまり、伊都国の港で所持品検査や女王宛ての文書などを検閲していた、』といった、伊都国が非常に重要な役割をもっていたこと、伊都国と邪馬台国や女王・卑弥呼とに密接な関係があったと解される記述がある。

そうしたことから、女王・卑弥呼の出身は伊都国であり、卑弥呼は亡くなったあと、伊都国の地に戻され埋葬されたのではないかとする新しい説が提唱されるようになったのだ。仮に伊都国に卑弥呼の墓があったと想定した場合、もっとも有力な候補になるのが糸島市有田にある平原王墓となるとの説がある。

平原遺跡 1 号墓



○魏志倭人伝の墓のサイズ

墓のサイズは重要だ。1 歩を六尺とし、当時の魏尺は 24 センチなので径百余歩は 144 メートル余りの径となる。径百余歩は径 150 メートルほどとなる。

3 世紀中頃に築造した古墳をまとめてみる。径は歩測で測ることができたので魏使はほぼ正確に測定できたはずで、倭国の国力や戦力分析を目的としていたので、容易に歩測できたはずなので、他人任せにせず、測定結果をほぼ正確に報告したはずだ。倭国を強大な国に見せかけなければならない勢力が、報告書に手を加えて誇張した。墓のサイズもその一つだとする意見もあるようだが、果たしてそうだろうか？誰が見てもすぐにわかるようなことは曲筆しないだろう。後の

世になって、魏志倭人伝の作者・陳寿が墓のサイズを誇張して書き変える動機も見当たらない。

3 世紀頃に築造された墓の中で魏志倭人伝にあるサイズの墓は限られている。自説に合致するようにあえてサイズを読み替えるのは避けるべきである。

既に発掘した古墳の中では棺の槨の有無、銅鏡、被葬者が女性かどうか、金印、その他の発掘物が決め手となるが、いずれも該当していない。

○3 世紀頃の墓の古墳

		形式&サイズ	被葬者	銅鏡他の発掘
平原古墳 1 号墳 弥生時代終末期（3 世紀初）	福岡県糸島市	墳丘墓 12m×14m	女性と考えられている。イヤリング等の装身具が多いこと、武器がほとんど無いことによる	全て割られた銅鏡 40 面、その内直径 46.5 センチメートルの大型内行花文鏡が 5 面 ・メノウ製管玉 12、ガラス製勾玉 3、ガラス丸玉 約 500、ガラス小玉 約 500、ガラス管玉 約 30、ガラス連玉 約 900 ・耳環 3 破片 ・素環頭大刀 1
津古生掛古墳 （つこしょうがけ） 3 世紀末頃	福岡県小郡市	長突円墳 長さ 33 メートル 径 28 メートル	この地方の有力者	方格規矩鳥文鏡一面、 鉄剣 1 振、ガラス小玉 57 個、鉄鏃 31 本と周溝から出土した鶏形土製品 3 個体
那珂八幡古墳、3 世紀中葉	福岡県福岡市	長突円墳 全長 75 メートル	当時この地を支配した首長であり、両河川即ち福岡平野	

			全体を支配した北九州の中小首長であると考えられている。	
光正寺古墳 3世紀中～後半	福岡県糟屋郡宇美町	前方後円墳 長さ 53 メートル	現在の糟屋地域を当時支配していた豪族または王	
箸墓古墳 280 ～ 300 年 4 世紀の説もある。	奈良県桜井市	前方後円墳、 後円部の径 150m、 長さ 278 メートル	宮内庁により第 7 代孝霊天皇(生没年不詳)の皇女、*2. 倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめのみこと)とされている。また継体天皇の皇后の手白香皇女(たしろかのひめみこ、507 年に皇后となる)の墓に指定している。	
纏向石塚古墳 3 世紀初頭～中期		纏向型前方後円墳 全長 96 メートル 後円部 64 メートル	被葬者は不明	周濠より弥生時代後期最終末期から古墳時代初頭の土器が出土している。その他、弧紋円盤(こもんえんばん、吉備系の祭祀用遺物)、朱塗の鶏形木製品、木製鋤・鍬、横槌、水槽、建築部材などの木製品、土師器(纏向Ⅰ式期)が出土した。

勝山古墳 3 世紀前期 ～後期	奈良県桜井市	前方後円墳 全長 115 メートル、 後円部 約 45 メートル	不明	出土遺物：主として周濠部より出土 ・木製の刀剣把手 ・団扇 ・槽等の祭祀具 ・U字形木製品（くびれ部の周濠から出土） ・土師器（はじき、布留式土器）
黒塚古墳 4 世紀初頭 ～前半	奈良県天理市	前方後円墳 長さ 130m		
ホケノ山 3 世紀中頃 4 世紀前の可能性 がある	奈良県桜井市	前方後円墳 長さ 80 メートル 径 55 メートル		・石囲い木槨(割竹形木槨)を持つので、該当しないことになる。 ・出土品 画文帯神獸鏡、鏡片、鉄製刀剣類、銅鏃、鉄製農具など
秋津遺跡 初期大和 王権時代 (3 世紀後	奈良県御所市	古墳ではない		

半～4 世紀 中葉)				
---------------	--	--	--	--

*2. 倭迹迹日百襲姫命

第7代孝霊天皇と、妃の倭国香媛（やまとのくにかひめ、意富夜麻登玖邇阿礼比売命<おほやまとくにあれひめのみこと>/経某姉<はえいろね>/蠅伊呂泥<はえいろね>）との間に生まれた皇女である。生没年不詳。

『襲姫は大物主神（おおものぬしのかみ、大和(奈良県)の三輪(みわ)山に鎮座する神で、大神(おおみわ)神社の祭神。)の妻となったが、大物主神は夜にしかやって来ず昼に姿は診せなかった。百襲姫が明朝に姿を見たいと願うと、翌朝大物主神は櫛笥（くしげ、櫛や化粧の道具を入れておく箱）の中に小蛇の姿で現れたが、百襲姫が驚き叫んだため大物主神は恥じて御諸山（三輪山）に登ってしまった。百襲姫がこれを後悔して腰を落とした際、箸が陰部を突いたため百襲姫は死んでしまい、大市に葬られた。時の人はこの墓を「箸墓」と呼び、昼は人が墓を作り、夜は神が作ったと伝え、また墓には大坂山（現・奈良県香芝市西部の丘陵）の石が築造のため運ばれた』という。まさに神話の世界であり、実在性が疑われる。

4. さいごに

3世紀頃に築造されたと思われる古墳の中で、150メートルほどのサイズは箸墓古墳のみと言っても過言ではない。結局は箸墓古墳を発掘してみなければ先が見えてこないようだ。無理とは分っているが。

参考資料

- ・ウィキペディア
- ・原田大六著；卑弥呼の墓
- ・安本美典著；「邪馬台国畿内説」徹底批判

以上